

羽州酒田の海 松隈義勇

—「あつみ山や」の句と「暑き日を」の句—

出羽国の酒田は最上川河口に位置して、最上川舟運の便を扼し、かつては奥羽きつての商港として栄えた。「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」とうたわれた本間家もここを本拠としたし、西鶴の『日本永代蔵』に書かれた鑑屋などのような豪商が軒を連ねた。

芭蕉は、『おくのほそ道』の旅の途次、その栄えていた酒田を訪れ、伊東玄順（淵庵不玉と号す）という医師の家に草鞋を脱ぎ、象潟に行った四日間を挟んで、前後まる九日間滞在した。この時期は非常に暑かったようだが、あちこちの俳席に招かれたりして俳諧の催しを重ねている。象潟は、松島と並ぶ奥州の名勝で、この旅の大きな目あての一つだったが、曾良の日記によると、象潟行きの日は激しい雨ふりであった。吹浦に一泊し、女鹿、三崎、小砂川、関などを経たと書いてある。

私もこんどの旅ではその道筋を通ってみた。七月二十一日、暑い日だった。酒田からの道は海沿いの美しい風景が続いたが、松林の

多い吹浦の集落を出はずれてすぐに、羅漢岩という奇岩の群れが海辺にあり、そこに程近い道ばたに芭蕉句碑が立っていた。大きめな石のおもてに、

あつみ山や吹浦かけて夕すずみ

と、矢田挿雲筆で刻んであるが、まだ新しい碑だった。

その先で心を引かれたのは、女鹿というその名も美しい漁港のたずまいであった。潮水のような入江も、眠ったような漁家も、芭蕉が通った時のままそう変らないように思われた。その先の、三崎峠が海に突出した所が昔の有耶無耶の関の跡だと伝えられる。海を見下す断崖の上にタブノキの密林があり、細道が通じていて昔の石畳が所々にある。林を出はずれると視界が開け海が見えて絶景である。象潟については前にも書いたことがあるので省略する。

「あつみ山や」の句は、象潟から戻った六月十九日に、宿を提供してくれた伊東不玉亭で催した三吟歌仙の発句として発表されたもので、曾良の書留には「出羽酒田伊東玄順亭にて」と前書しであり、これを発句とした三吟歌仙が記してある。前書について

は、当の文順(不_レ正)が編んだ『継尾集』には「江上之眺望」とある。『袖の浦』(淇水撰、明和三年刊)によれば、袖の浦の江上に船を浮かべての吟で、「袖の浦江上眺望」と題した芭蕉自筆の懐紙もあったと云えている。船を浮かべた事実はずいぶん昔の日記にもなく疑わしい。

「江上」とは単に海のはとりの意味とも取れることばである。

いずれにしても、袖の浦での眺望に係る吟という点は動かさないだろう。袖の浦は最上川河口の南側につき出た袖の形をした洲崎の名で、『類字名所和歌集』に三十一首が録されているほどの著名な歌枕である。歌枕に熱心な芭蕉が本文にこの名と叙述とを省いたのは、象潟の条の効果を考慮したためであるろうが、「あつみ山」の句と、これに並ぶ「暑き日」の句には、その袖の浦での吟だということ意識が念頭に置かれていたことは疑いない。

さて「あつみ山」の句の内容だが、あつみ山とは新潟県との境に近い温温海泉の背後に聳える温海岳(七二八米)だという。その辺から吹浦までは海岸線で約八十キロ余に及ぶので、柳田国男の説のように鳥海山を誤って言ったものという見解も生じようし、海上に船を浮かべての吟だという説も生まれるわけである。しかし袖の浦の海辺に立って、遙か南方に見える地を指さされ、あの辺が温海でうすく見える山が温海岳だという説明を聞いただけでも、北の方には象潟への途次に見た吹浦の景を思い浮かべ、これを一つに取合わした、広大な句を成すことが、芭蕉の力量なら十分にできたことであるろうと私は思う。それに「熱し・暑し」と「吹く」(風が)との縁語の取合わせもあるし、それを「涼し・涼み」と連ねれば、俳諧的手法——歌枕を詠んだりする場合の貞門・談林以来の常套的手法であったが——も完成する。

さらに表に出ていない袖の浦という歌枕名であるが、温海山から吹浦までという表現の中におのずと袖の浦が包み込まれていると当時の俳諧師の間でならわかつたはずだし、袖と吹くと裏(浦)の縁語関係も意識の中にありそうにも思える。吹く風で袖が裏返るといふ涼しいイメージが生かされている可能性がある。こう言うのは、この句が挨拶の句という性格を持っているからである。挨拶の句は大景を大観した句であること、その地名を詠み込むこと、涼しいということばなどで敬待に対する感謝の気持ちを表わすことなどが条件である。「あつみ山や」の句はすべてその条件に叶っている。

ところで句の意味や味わいはどうか。まず「あつみ山や」という字余りの表現が問題になろう。其角の『類柑子』や、許六の『韻壺』には、この「や」がない句形で載っている。意味上からはその形でもよいか知れないが、芸術的な価値は著しく低下する。音調上からは、ゆったりとした莊重味をもったこの字余りの表現が、小休止を置いて、同じくゆったりとした中七の声調に流れてゆき、重々しく、そして力強いおどかな下五でずっしりと受け留められる。ここから広やかにして雄大な大景がみごとに浮かび上がってくるのである。芭蕉が声調上の名手だったことは芥川龍之介などもすでに讃嘆しているが、この句などもそれを証明する一つである。

『棚さがし』の中で^{蓼太は}吹浦に旅しての実見で自悟した、と前置きして、「あつみやまや福浦と首をめぐらしたる句也。しかれば句の骨柄ばかりに余したるものにはあらず。面白み又々格別なり。」と述べているが、すぐれた一つの解釈である。

「や」について、許六の『字解法師』には一見「名所のや」のようであるけれども、むしろ「口合のや」と考えるべきだと説いてい

る。「名所のや」とは「松島や」「象潟や」の類で、名所を提示する強勢・詠嘆の切字である。「口合のや」とは「校本芭蕉全集」にみえる今榮蔵氏の解説によれば、強勢・詠嘆の「や」が上五の第三（稀に二）音目にはいつて語調を整える程度の軽い働きをするものということである。許六はその例として「是や、世の煤に染らぬ古格子」をあげ、その他「月や紅葉」「須磨や明石」などもあげている。「あつみ山や」の「や」には確かにそうした性質が潜在していることは認められるが、上五の末尾にある点に疑問がある。それにして、「温海山や吹浦」として、単に語調を整えたものと取るのも、また二つの地名を並立する用法というのも納得し難いし、まして「吹浦」を呼び出すために「温海山や」を冠したというのは首肯し得ない。『奥の細道講読』の麻生磯次氏は、この「や」は詠嘆の切字でなく、あつみ山と吹浦との関係をあらわす「や」だと説いているが、明晰を欠くらしいがある。尾形仍氏は「おくのほそ道註解」で「名所のや」だとする。私も「名所のや」とするのが最も近いと思うのだが、ただ「名所のや」は一般に、中七・下五でその名所自体に関する叙述するのが常例なのに、「あつみ山や」の場合は必ずしもそうではないという点が異例で、若干の躊躇を感じる。思うに、この「や」は強勢・詠嘆の切字であることには違いないが、通常の「名所のや」のような用法よりは軽くて、「口合のや」的な要素をもあわせ持たせて用いたものであろう。まず温海山を（ひそかに暑いという感じをも）強調的に提示しておいて、そこからずうっと吹浦の方へまで視線を（と同時に、心の活動の及ぶ範囲を）移動しつつ広げていく（また同時に、涼風も吹き渡っていく）という意味合いに解したいのである。とにかくこの「や」はすばらしく効果

的な用い方だと思ふ。

それから「かけて」の意味だが、近刊の『日本国語大辞典』にある場所・時期から他の場所・時期にまで及ぼす」とある用法に当るのだろう。弥吉菅一氏等共著の『おくのほそ道』（芭蕉紀行集Ⅲ）の注には「離れた地名を一句によみこむ時に用いる」とある。芭蕉に「天祥や京江戸かけて千代の春」（延宝四年）の用例もみえる。温海山と吹浦との間の広い範囲にわたって、ずうっと見渡すのであり、また涼しい風が遙々と吹き通っていくのでもある。視点座（作者の位置）はやはり袖の浦あたりということになるか。

さて、暑しと吹くことばのしゃれがあることは前にもいった通りで、それには「吹浦」と書くことがだいじで、「福浦」など書いたのではだいなしになる。このことは『梟日記』で支考が述べている通りである。吹浦は今日ではブクラと呼ばれるが、『大日本地名辞書』などにはブクウラとしてある。表記は福浦・福良とされた例もある。だから修辭上のしゃれさえ考えなければ、福浦と書いてもいいのである。

それはさておき、この句からは、私にはことばのしゃれがまだあるようなにおいがどうも感じられてならない。そこでいろいろ思い回らしてみたのだが、結果はこじつけの範囲を出られないようである。笑ひ捨ててもらえることを条件に、あえて書いてみることにする。まず「福浦」と書き替えてみる。すると「福」と「占」と「かけて」と「ゆふ」と四つの縁語関係が浮かんでくる。「かけて」は神仏に願って希望・生命などを託するという意味があり、「神かけて」などと使う。『おくのほそ道』にも「定なき頼の末をかけ」と用いてある。そこで福を神にかけて占ない願うという意味が考えら

れる。「ゆふ」は「結ふ」とも、「木綿」とも掛けられる。いずれも神仏に關係がある語である。「結ふ」なら福を結ぶと考えることができる。もしこれらの縁語がなりたつものとすれば、これは祝言の意を寓する大変重い挨拶の句といふことになるわけだが、これはやっぱりこじつけとしか見られまい。所詮とんだお笑い草の言葉遊び以上のものではないが、ただ芭蕉句そのものが、こういう推測を呼び出す可能性の契機を秘めているとはいえなくもないのである。つまり芭蕉の句には二重、三重の意味構造をなしているものが少なくないことは理解しなければならぬ。そういう点、近代以降の作品とは、発想も表現も違っているので、芭蕉ばかりではないが、古文芸に叙景だとか客観描写だとかいふ物指だけをあてはめることは、どだい間違っているのである。今日の眼から見れば芭蕉の作品などはみな作りもの（虚構）だといふことになる。

二

「あつみ山や」の句碑は酒田にもある。もとより酒田にあってしかるべき句碑であって、港に近い日和山公園の一角にある。

私が酒田に旅寓して何より見たいと思つたのは、海の落日の景であった。最上川が流れ入るあたりの海に沈んでゆく真夏の真赤な夕陽を見ることであつた。これを見るの一番よい所はときくと、それは日和山だといふので、日の傾く頃日和山に行った。公園内に一株だが大きい合歓の樹があつて、夕景近い光の中で、淡紅色の花がほの明るかつた。

展望台は真下に港を見下す位置にある。港は、遙かに横たわる最上川と併行して、こちら側すなわち市街側を掘って造つたものによ

で、川との間を仕切る天の橋立風の砂洲が左手から伸び出て、その先端に標識燈台の影があるようである。展望台から港へ向つて少し下つたあたりの樹の茂みの中に、古めかしい形の小さな白い燈台が首を出している。日本最古の木造の燈台で文化財だそうである。港から右手を望むと、吹浦方面へ続く海岸があるはずだが、中景のあたりはコンピナートのタンクなどが林立して、先の方は見えない。日はずんずんと傾いていく。あいにく雲が多いが、その一面の雲が燃え立って、真赤な夕焼けになつた。海も最上川も誘われて同じ色に染まつた。夕日は下界に義理を立てようとするかのように時々雲の間から顔を出して、名残惜しげに沈んでゆく。水平線の上には横にたなびく雲があるが、夕日の落ちる瞬間はその真下に当る海面がすさまじい紅蓮の色に燃えた。日の沈んだ所はちょうどここから真正面に当る最上川河口の辺であつた。

日が沈みおわつて、だんだんに天地の朱がおさまると、黄昏のけはいが旅情を運んできた。……………

私が落日を見たいと望んだのは、例の芭蕉の句、

暑き日を海に入れたり最上川

が心を占めていたためである。この句は六月十四日、象潟行きの前に、寺島助助の安種が崎の別荘で催された俳席での発句として詠まれた、挨拶の意を寓する「涼しさや海に入たる最上川」が初案であつて、実際は「あつみ山や」の句より前に作られたものかと思われれる。この有名な句から私がいいたイメージは次のようなものであつた。

滔々とし悠々として大最上川が海に流れ入っている。波浪が押し

上げてくると、川の流れとせめぎあつて時々銭塘江せんとうがうのように波立ち騒ぎ、流れのはずれでは渦を巻くが、しかも全体として大河は少しもそれらの小波乱を意に介する風もなく、平然として大きな水量を海に流し入れている。その河水の海へ押し出していく真上に、真赤な太陽が落ちかかつて、波の騒ぐ中へやがて静かに沈んでいく。涼気がいつのまにか身を包んでくる。ちょうど激しい流れが夕日を海へ押し沈めたかのように思われる。そんなイメージであった。

私はこんどまさしく最上河口に沈む夏の太陽をこの目で見ることができ、すばらしい感動に満ちた日没の景に接することができた。しかし前に芭蕉の句によって描いたイメージとは大分違っていたことを白状しなければならぬ。だいいち、最上川が海に入る所は波打ち騒ぐなどということもない。これは想像を凌ぐ茫洋たる大河で、漠然と海に連なっているのである。現在の港は前にも言った通り仕切りがつけられて川とは別になっているが、古い地図などを検すると、河口が掘り広げられたままが港になっていた模様で、今よりもっと広い河口であったかと思われる。芭蕉が来た時は、梅雨期の後で水嵩が増し濁流滔々の気味があつたとしても、やはり茫洋と海と連なる姿は変わらなかつたろう。名だたる大急流の趣は上流だけにとどまるようだ。

これだけの大河が海へ流れ入るのだから涼しいという感じはあつたにしても、暑い太陽をこの川が海に押し流し入れるというイメージなど湧いてこないだろう。そうしてみると、私の前もってほんやりと抱いていた落日の景観を詠じた句という印象は一考を要することになる。

落日の景というのは、例によって叙景・実景としての立場で句を

解しようとする態度であつたようだ。そういうえば「暑き日」を太陽と解する説を出している人を見ると、内藤鳴雪うちねりゆき（芭蕉俳句評釈）幸田露伴・阿部次郎あべしげ（芭蕉俳句研究）加藤楸邨かとうきゅうそん（芭蕉講座）山口誓子やまぐちちかこ（芭蕉秀句）などで、多く近代的立場にたつ実作者ないし評論家である。中でも誓子氏は、私は日を太陽と受け取る、と断言し、「暑き一日を海に入れるとはどうすることであるか。『流す』ならわからぬこともないが、『入る』ではわからぬ」と、反対説の「暑き一日」とする見解を真向から反駁している。

ではその「一日」とする説はどうか。この方は理詰めで、「暑き日」「寒き日」という語を太陽の意味で使つた例は芭蕉を含めて古い俳句にはないという調査（鈴木健一郎氏）や、古来の俳書（『塵衣』）に「暑き日、日次ひつぎたるべし」とあるとの指摘（尾形仍氏）があり、また初案形に太陽という意味の全くない点を重視する説（井本農二氏）もあるが、いずれもいわば学者の側からの発言である。太陽説は実作者を主とする印象批評的な立場であり、一日説は学者の実証研究的な立場であるが、これは物的証拠のある後者に分がありそうだ。

ただし近來の説の多くは「暑い一日」の意ではあるが、海に落ちる入日を見た印象もとどめられていると、やや折衷的に解している（萩原井泉水氏・麻生磯次氏・尾形仍氏など）。芭蕉の例の重層的表現を好む作風のことを頭に置かなら納得できる見解である。山本健吉氏も折衷説のようだが、『芭蕉その鑑賞と批評』の中で「重点はあくまで太陽にあり、『暑き一日』の意は、裏に潜んでしまったと取って置いた方がよい」と、太陽に重点をおき、さらに近著『行きて帰る』ではほとんど太陽説一本にしぼって説いている。

私は何も卓見に満ちた山本氏の説に異を立てるつもりはないが、

最上河口の落日を突見した印象では、重点は「暑き一日」にあると結論したい感じがする。滔々たる急流であれば太陽と相搏つ壯観もあるだろうが、最上川下流のような淼々漫々たる大河が海へ流し入れるその対象が、燃える朱円団であつては、実体ははつきりしすぎるといふか、焦点がしぼられすぎるといふか、鮮烈すぎるといふか、どこかそぐわないのである。これは「一日」といふ、実体的ない、抽象的概念的な、とてつもない広がりをもつ、漠とした、大きなもの——時間・空間を一つにしたもの——であつてこそ、かえつて最上川の底知れぬ大きさと力が出てくるのではないか。しかももちろん、この暑い一日を海に流し入れたという発想のもとには落日を見たことの体験に根ざしていただろう。一日というものは太陽の運行を除いてはつかめないものだから、日没といつしよに一日が海に没したとらえたわけであらう。

ところで、「入れたり」といふ川を擬人化した表現が句の生命だろふと思われるが、しかし近代以降の評釈・注釈の類では「わざとらしい」とか「理に傾いた曇りがある」とかいつて概して不評である。「入れたり」の表現は『継尾集』にある初案形が「涼しさや海にいたる最上川」と仮名書きしてあるので、最初から他動詞であつたことがわかる。この場合他動詞であるから、何が何を入れたかが問題であるが、山本健吉氏は最上川が最上川自身を海に入れたというような解を示し、尾形仍氏は最上川が涼しさを海に入れたと解している。どちらももつともであるが、そのどちらともとれるまいなところが、意味の二重構造の面白さだともいえそうである。ただし他動詞の目的語を明らかにしていない点は不安定のきらいがある。それで「暑き日を」と改案したのだと山本氏は言う。そうだ

と思うが、その段階では、その目的語が「一日」と「太陽」との両義に解されることに、二重構造の美学の焦点は移されたと見てよからうか。

芭蕉の句の中には自然物を擬人化して他動詞的行動の主体とする形の句がいくつも見られる。同じ最上川を詠じた「五月雨をあつめて、早し最上川」がそうだし、「五月雨の降りのこして、や光堂」「有難や雪をかほらす南谷」「荒海や佐渡によこたふ天河」などがそれだ。これは宇宙の根本実在を「造化」とでも呼ぶべき物我一体の生命的なものとする、その世界観から出ているように思われる。自然物も人間（我）もその造化のあらわれであり、同じ生命を分け合うものにとらえるところから、自然物が現わす行動の中に我も主体的にかかわりあっているわけである。すなわち深層意識の中では我も自然物と行動を共にしているような潜在観念が生ずるのである。こういう自然物との潜在的な協働性は、行動力が強く出る他動詞を用いた場合に一層強くなり、表現に深みのある迫力を生じさせる。

「暑き日を」の句についていえば、暑い一日ないし太陽が海と最上川と相合う辺に入つたのではなくて、最上川が暑き日を海に入れたのであつて、その力に満ちた行動には潜勢的に芭蕉も協働しているのであり、さらに奥には造化の生動があるのである。

「入れたり」は、このように芭蕉の世界観の深奥に根ざす表現であり、その芸術の偉大性を示すものである。それを理屈があるとか、わざとらしいとかいふように見るのは、近代の写実主義の立場だけで芸術をみる眼の誤りである。